



**10** 拝廊の5体の聖人像は、焼失した教会の正面に立っていたものです。これらも火災を免れました。6体目の像（聖クレメンス）は教会を新築した際に作られました。扉を縁取る美しい砂岩は、現在「瀕死のライオン像」がある採石場で採れたものです。表玄関の上方では、赤子のイエスを抱いた聖母マリア像が後光に美しく包まれています。木製扉には表情豊かな彫刻が施されており、左半分には聖レオデガー、右半分には聖マウリティウスが描かれています。柱頭の上に立つ像は、竜を従えた聖ビートです。

**11** 正面玄関と塔は1633年の火災のあとに造られ、今ではルツェルンの町の象徴となっています。再建時には、古い教会の塔の下部のみがそのまま残されました。北塔（左）の壁がんに、彩色された砂岩に1512年に彫られたオリブ山で祈るイエスの姿が見えます。その周りは、眠っている使徒と近づいてくる兵士で囲んであります。塔の間には丸天井の門があり、拝廊に続いています。アーチの要石の上に飾られた紋章（ルツェルンと双頭の鷲）の両側には、教会の守護聖人であるレオデガーとマウリティウスの2体のレリーフ像が立っています。2つの窓の間、真ん中の飾りぶちに立つのは、竜を退治する大天使ミカエルです。

## 歴史

735/736年頃、南ドイツの貴族が現在のホーフ地区に小さな修道院を寄贈し、聖マウリティウスに奉献しました。この修道院は独立していましたが、1135年頃ムルバッハ（アルザス）に属する司教座教会首席司祭の管区となり、聖レオデガーが守護聖人となりました。1291年、ムルバッハ大修道院は財政困難に陥り、付属の建物を含め、ルツェルン管区をハプスブルク家に売却せざるを得なくなります。ルツェルンは1332年、スイス連邦に加盟し、その後1433年までにこの修道院を含むすべての権利をハプスブルク家から徐々に取り戻しました。1455/55年にはベネディクト会修道院から司教座聖堂参事会員の司教座教会となり、以来、司教座聖堂参事会員が毎朝毎夕、教会の定時課を行っています。教会はその後1633年のイースターに、台座まですっかり焼け落ちてしまいます。インゴルシュタットのイエズス会士ヤコブ・クラマーが教会新築を委託され、すべての設備や飾り付けがほぼ整ったあと、1644年に祝別されました。

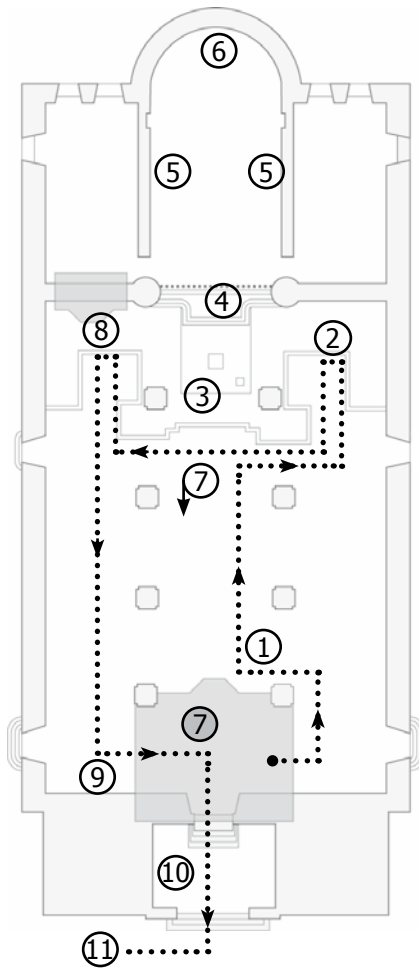
## その他のご案内

- ・ 美術ガイドブックを教会の玄関ホールで販売しています。
- ・ 録音（CD、DVD）されたグランドパイプオルガンとヴァルペン製オルガンの音色を、開館中に小教区事務所でお求めになれます。
- ・ お問い合わせ：Pfarrei St. Leodegar, CH-6006 Luzern,  
Tel. +41 (0)41 229 95 00  
Eメール：st.leodegar@kathluzern.ch;  
www.hofkirche.ch

# 聖レオデガー イム・ホーフ 司教座・教区教会 (St. Leodegar im Hof)



## ホーフ教会のご案内



### 凡例

- 1 身廊
- 2 右脇祭壇
- 3 秘跡を執り行う聖所
- 4 内陣障壁とキリスト十字架像
- 5 聖歌隊席
- 6 主祭壇
- 7 グランドパイプオルガン
- 8 聖母被昇天の祭壇（左脇祭壇）/  
ヴァルペン製オルガン
- 9 洗礼盤
- 10 拝廊
- 11 正面玄関と塔

**1** ホーフ教会は、スイスの後期ルネサンス建築の中では最も重要な建物と見なされています。その身廊は全長60メートル、高さ20メートルで、内装はイエズス会士ヤコブ・クラウの手によります。簡素なヴォールトの縁取りや交差線が、全体的にあっさりとした、それでいて心に響く深い印象を作り出しています。高天井のネーブ、左右のゴシック風の窓、化粧しっくいを使っていないところなどは、1633年に焼失したゴシック様式の教会を思い起こさせます。各祭壇、長椅子、聖歌隊席、説教壇、パイプオルガンの前面は、彫刻家のニクラウス・ガイスラーと彼のアトリエが制作したものです。このようにさまざまな様式が使われているにもかかわらず、教会内部は全体的に統一が取れ、調和した空間が目に優しく映ります。

**2** 左脇祭壇には、イエスの亡骸を膝の上に乗せた聖母マリアのピエタが飾られています。1633年の火事を免れたこの彫刻は、その後見事に祭壇に組み入れられました。その周囲には、ゴシック様式のピエタに調和するように、悲しむ人々が5人配置されています。祭壇の残りの部分は、10台ある他の脇祭壇と同じく後期ルネサンス様式です。

**3** 聖所は2001年に改装されました。秘跡を執り行うためのキューブ型の祭壇と黒い玄武岩を使った聖書朗読台は、ザルネンのクルト・ジグリストの作です。高級感あふれる演壇は赤い硬石膏製です。

**4** 内陣障壁（1643）は遠近法を用いた年代物の格子細工です。格子の上の大きなキリスト十字架像は16世紀に作られたもので、やはり燃え盛る教会から救い出されました。

**5** 格子で分離された内陣には、見事な木彫りが施された聖歌隊席が並んでいます。ここでは毎日、司教座聖堂参事会員が定時課（賛課と晩課）を行っています。

**6** ローマ様式の主祭壇は、シュタンザーホルンの採石場で採れた黒とグレーの大理石でできています。白い部分は、同じく中央スイスで採れた雪花石膏です。アルプス以北では、今日まで伝統的なバロック様式を採用したローマ風の祭壇は作られておらず、この祭壇は1639年の建立後、信者に堂々とした印象を与え続けています。オリーブ山の情景を描いた祭壇の絵は、イタリア・バロック時代を代表する画家、ジョヴァンニ・ランフランコの作です。

**7** （ここで後ろを振り向くと、オルガンがよく見えます）  
1648年に作られたグランドパイプオルガンは、19世紀にフリードリヒ・ハースにより、また1972～77年にはメネドルフのオルガン製造会社クーンによって修復されました。5949本のパイプは84本の音栓にまとめられ、風箱と5段の手鍵盤および足鍵盤で成り立っています。屋根裏の音響空間にあるレインマシンは、世界唯一の器械です。1648年に鑄造されたパイプは最大で高さ10メートル、重量383キロです。

**8** 聖母被昇天の祭壇にある四角い彫刻版は、1633年の火災を免れました。聖母マリアの死を描いたこの版画は、マルティン・ショーンガウアーの作。ゴシック調ですが、1640年頃に造られた祭壇とよく調和しています。細やかに表現された使徒が死の床に横たわる聖母マリアを囲む様子も印象的で、ホーフ教会で最も美しい祭壇となっています。その上にはヴァルペン製オルガン（聖歌用オルガン）のパイプが見えます。このオルガンは1842～44年に制作されました。

**9** 聖杯の形をした黒大理石製の洗礼盤は、ニクラウス・ガイスラーが教会の再建後間もなくして作ったもので、中央スイスではこれを見本にさまざまな洗礼盤が作られました。囲い格子はルツェルンの金属作家クリストフ・カルトバッハーの作です。